



Vol.6 No.1
 発行人 阪本 是丸
 編集人 遠藤 潤
 〒150-8440 東京都渋谷区東
 4丁目10番28号
 電話 (03) 5466-0162
 FAX (03) 5466-9237

日本文化研究所 平成二十四年度事業計画① デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開

井上 順孝

本プロジェクトは、平成二十二年度から三年計画で発足し、本年度は、最終年度にあたる。事業内容は大きく二つの柱から構成されている。一つは、研究開発推進機構のデジタル・ミュージアム(DM)全体の運営であり、もう一つは、本プロジェクト独自の調査・研究の展開と、それに基づくデジタル・コンテンツの拡充である。それぞれについて、本年度の計画を以下で述べる。

一、デジタル・ミュージアムの運営
 平成十九年より運用されてきたDMは、様々なデータベース、事典、ライブラリ、資料などをオンラインで総合的・横断的に利用できるもので、博物館や他大学等でも利用されているデータ管理ソフト「ミュージズテーク」のシステムを用いている。機構発足以来、各機関で選ばれた担当者による「デジタル・ミュージアムワーキンググループ」を結成して綿密な意見交換を行い、基本シ

ステムの構築とソフトウェアの改善、内容の充実などに努めてきた。

基本的な構成はすでに確立され順調に運用されているが、ユーザーの目線に立ち、よりアクセスしやすく利用しやすい環境にするためには、まだ改善の余地が多くある。本年度も、こうした細かな改善を一つずつ行っていくことに主眼を置く。

具体的には、機構内各機関のウェブサイトを担当者とも連携し、各機関の刊行物や成果公開、DMのサイトにアクセスしやすくするよう、本DMワーキンググループの主導で各ウェブサイトの改善・修整を進める。並行して、各機関の研究成果のデジタル化を進め、DMとも連携した形での機構の研究成果のアーカイブ化推進の方向性を検討する。とくに、ORC事業により作成されたデータ等は、平成二十三年度で事業が終了した後も、引き続き利用できるようにする。これらの業務を円滑に遂行するた

目次

◆ 日本文化研究所 平成二十四年度事業計画① デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開 (井上順孝)	1
◆ 日本文化研究所 平成二十四年度事業計画② 「国学院大学 国学研究プラットフォーム」の構築 (遠藤潤)	3
◆ 学術資料館 平成二十四年度事業計画① 考古学資料館収蔵資料の再整理・修復・研究・公開 (深澤太郎)	4
◆ 学術資料館 平成二十四年度事業計画② 近代学術資産の資料化と地域連携活用に関する研究 (小川直之)	5
◆ 学術資料館 平成二十四年度事業計画③ 伊豆諸島における在地信仰の考古学的研究 (内川隆志)	6
◆ 学術資料館 平成二十四年度事業計画④ 神道祭祀の資料論的研究と関連資料の整理分析 (加瀬直弥)	7
◆ 校史・学術資産研究センター 平成二十四年度事業計画① 国学院大学における大学アーカイヴズと自校史教育の構築と展開 (齊藤智朗)	8
◆ 校史・学術資産研究センター 平成二十四年度事業計画② 国学院大学における学術資産研究の発展と公開 (齊藤智朗)	9
◆ 研究開発推進センター 平成二十四年度事業計画 (遠藤潤)	10
◆ 二十一世紀研究教育計画委員会研究事業 地域・渋谷から発信する共存社会の構築 (菅浩一)	11
◆ 事業計画・人事一覧	12
◆ 彙報	14
◆ 資料紹介 古代の案 (復元)	16

め、DMワーキンググループのメンバーとソフト提供会社の担当者、機構事務課員を交えての定期的な会議を主催し、システムの改善・拡張、効率的な運用に務める。

本DMのコンテンツ拡充の一環として、前年度に引き続き、特に「動画」素材の利用を促進し、併せてコンテンツを作成し公開する体制の整備を目指す。具体的にはスマートフォンアプリの作成・公開体制の構築を検討する。これは、後述の宗教文化教育の教材開発とも連動させて展開させる。

また、日本文化研究所には昭和三十年代から近年に至るまでの研究所関連の学術講演会や研究会などの録音テープが所蔵されており、そのデジタル化がこれまで進められてきた(CD四百枚超)。それらの音声データの中から学術的価値の高いものを選び出し、DMコンテンツや教材の一つとして公開できるようデータ整理を進める予定である。

二、プロジェクト独自の研究とデジタル・コンテンツの構築
 ① 教派神道・神道系新宗教の資料

整理とデジタル化、公開の開始
本研究所ではこれまで長期にわたり、教派神道(神理教・神道修成派など)や神道系新宗教関係の基礎的な文書資料を大量に集めてきた。

情報環境や技術の進展に合わせ、すでにこれらをデジタル化し整理する作業を進めてきており、大半が完了している。本年度はこれらの文書の画像データを順次公開していくためのメタデータの整備を継続して行う。

神理教関係資料のデータ公開を中心的に行い、続いて神道修成派関係資料のデータ公開の準備を進める。

また、神道系教団からの委託を受けた教団基礎資料(書簡類約二万点)のデジタル化作業も引き続き進める。並行して、データ整理と資料内容の分析を始める。

② 神道・日本文化関係論文の双方

向翻訳(日本語文献の外国語訳)ならびに外国語文献の日本語訳)

本プロジェクトでは、先行プロジェクトから継続して、毎年三〜四本程度の神道ならびに日本文化に関する論文を選定して双方向で翻訳し、ウェブ上で公開を進めてきた。

すなわち日本語論文の外国語訳と、外国語論文の日本語訳である。二十三年度は、英語論文の日本語訳二本、日本語論文の英訳二本を行った。

二十四年度も同様の事業を継続し、比較的近年に刊行・発表された四本程度の論文を選定し、翻訳する。英語論文の翻訳あるいは日本語論文の英訳以外にも、韓国語など他の言語との双方向翻訳も検討する。ま

た、対象論文の内容についても、狹義の神道に関するものに限らず、広く日本文化に関わるもので翻訳・発信の意義が高いものを候補に含める。

現在、翻訳された論文はPDFファイルの形で、本研究所サイトに公開されている。本年度は公開体制の再検討を進め、カテゴリやキーワードの設定などユーザーの使いやすい観点から改善を進める予定である。

③ オンライン神道事典EOS

(Encyclopedia of Shinto)の拡充

英文のオンライン神道事典であるEOSは、旧版だけで、すでに三百万をはるかに超えるアクセスがあり、広く世界に知られ利用されているコンテンツとなっている。本年度もその内容のチェックを行い、充実をはかっていく。

まず、すでにアップロードされている本文の内容を継続してチェックし、改善していく作業である。複数の翻訳者が関わったコンテンツであるため、統一性・整合性の確保には引き続き時間をかけていかなければならない。

一部の章については、韓国語訳を継続して進めている。「第四部 神社」については翻訳が完了し、アップロード済みである。本年度は、「第八部 流派・教団と人物」(計百十八頁程度)の翻訳を完了させる予定である。

なお、音声再生などEOS旧サイトからの引き継ぎが不十分だった機能については、改善が実現したので、これを受けて、新旧サイトの完全切

り替えを行う。

平成二十二年度に着手した年表部分の英文翻訳については、担当人員を増やして集中的に翻訳・チェックを進め、公開の目的を立てる。図録や神名表などについても、公開の形式を検討し、翻訳を進める。

さらに、外国人向け入門用サイト A Beginner's Pictorial Guide to Images of Shinto に ついても、入門者・サイト訪問者の目線を踏まえて、引き続きコンテンツの充実をはかっていく。イラスト・写真等に加えて、後述する④の教材開発事業とも連携し、動画の作成・公開を集中的に進めていく予定である。

④ 宗教文化教育の充実のための教材作成

平成二十三年十一月十三日には、第一回「宗教文化士」資格認定試験が全国六ヶ所で行われ、九十一人が受験し五十八人が合格した。同資格制度の運営を担う「宗教文化教育推進センター」(CERC、サーク)は、本研究所内に設置されており、同制度・同センターと本研究所ならびに本プロジェクトは強固な協力体制を構築してきた。本年度六月二十四日には第二回、十一月十一日には第三回の同試験が行われるため、引き続き協力体制を取っていく。

また、本プロジェクト代表者である井上順孝を研究代表者とする科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」は、本年度で二年目となる。引き続き、本プロジェクトと連携して教材開発

を進めていく。

具体的には、プロジェクトメンバー数名からなる「動画作成チーム」を結成し、神道や日本文化・宗教文化の理解に役立つ動画教材の作成・収集・整理と公開体制の整備に重点的に取りかかる。

また、宗教文化の学習に資する映画、世界遺産、博物館、参考文献などに関するデータベースの拡充やオンライン教材の作成・発信に関わる調査・研究などを前年度に引き続き実施する。

⑤ 国際研究フォーラムの開催

本プロジェクトでは、毎年プロジェクト内容と密接に関連するテーマでの国際研究フォーラムを開催してきた。本年度は九月二十九日に、宗教文化教育の裾野の広がりを捉えるべく、文学や美術など諸学・諸領域における宗教文化の扱われ方をテーマとし、国内外から専門研究者を招いてフォーラムを開催する。そのテーマと内容は事業④の教材開発とも関連づけられており、今後の教材開発と拡充にも大きなヒントをもたらす機会となると思われる。

以上に加え、本年度は「宗教と社会」学会・宗教意識調査プロジェクトと合同で、全国の大学生を対象にした「第十一回 大学生宗教意識調査」が実施されている。調査では宗教文化教育のニーズについても問うている。入力と集計作業を行ったのち、年度中に報告書として刊行する予定である。

日本文化研究所 平成二十四年度事業計画② 「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の構築

遠藤 潤

一、事業の目的と概要

日本文化研究所の二つの研究部門のうち、本事業は「神道・国学研究部門」の研究事業として行われるものである。日本文化研究所は創立以来、神道の基礎的研究、神道・国学関係人物研究、神社史料調査など、神道・国学に関する研究活動を継続的に行ってきた。本事業は、こうした成果に立脚しつつ、国学に関する基礎的研究を進めるとともに、学内でさまざまな行われている国学研究のプラットフォームを構築し、ひいては学外との研究交流の基点たらしめようとするものである。事業内容は次の通りである。

- I 国学研究の基礎データ構築
 - (1) 『古史伝』版本のデジタル化とそれにもとづく研究
 - (2) 国学者の地域拠点の研究
- II 国学に関する研究連携のための組織づくり
 - (1) 国学研究会の運営
 - (2) 異なるプロジェクト間での研究関係情報の共有

この事業は平成二十三年度から三か年にわたって計画されており、本年二十四年度は、その二年目にあたる。

二、平成二十三年度の研究成果

- I 国学研究の基礎データ構築

(1) 『古史伝』版本のデジタル化とそれにもとづく研究

『古史伝』に関する研究を進めるに先立ち、その前提となる『霊能真柱』について、平成二十二年度までの研究事業「近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究―霊祭・霊社・神葬祭―」の成果を点検しつつ、隔週での研究会において、同書本文の解釈について補訂を進め、同書に引用された『古史伝』の内容の確認を進めた。その上で、國學院大學図書館所蔵の複数の『古史伝』版本について、書誌をはじめとする基本情報を調査した上で、デジタルカメラによる撮影を実行した。また、研究利用のために以前のプロジェクトで撮影済となっていた『古史伝』稿本について、デジタルデータからのプリントアウトおよび製本を業者への委託により行った。

(2) 国学者の地域拠点の研究

加賀藩に関して、藩の神社政策に関する自治体史などの研究成果をリストアップし、重要なものについての検討会を行った。その政策および藩と国学者の関係について、十一月二〜四日に金沢市玉川図書館での資料調査を行った。また、長野県域に関して、平成二十四年三月二十一

二十二日に長野県立図書館および長野県立歴史館で、現長野県域の諸藩関係調査を実施した。これらの調査・研究を通じて大平門や気吹舎の門人および組織についての知見も得ることができた。

- II 国学に関する研究連携のための組織づくり

金沢での史料調査にあわせて、十一月三日、共同研究員である一戸渉(金沢大学准教授)の協力により、金沢大学サテライトプラザにおいて国学研究会を開催した。

三、平成二十四年度の研究計画

- I 国学研究の基礎データ構築

(1) 『古史伝』版本のデジタル化とそれにもとづく研究

『古史伝』版本の精読のための研究会を隔週で行う。これは、全体を網羅的に扱うのではなく、近世末から近代にかけての『古史伝』解釈の具体的なあり方に注目しつつ、各人が視点を定めて必要な箇所を精読する。研究会にあたっては『古史伝』稿本(秋田県公文書館所蔵)の複写本を適宜参照し、版本の形態になる以前の加筆・訂正などの編集作業についても配慮しつつ読解を進める。研究会の成果については、注釈を本文と結びつけて整理した形で記録し、デジタルの形で公開に向けて編集する。

(2) 国学者の地域拠点の研究

中津藩、紀州藩などの藩に関わる神道・国学関係資料の調査については、首都圏の収蔵機関における調査

を中心とし、遠隔地域への出張調査は行わない形で進める。

鈴屋および気吹舎の地方門人の活動の分析については、江戸・東京での国学者の活動(幕末期・明治期)について、東京都公文書館などの機関で調査を進める。また、大平・内遠門、神習舎などの門人組織については、先行研究やこれまでの研究事業の成果を見直しつつ、包括的な把握を目指す。また、神習舎については学内資料の調査を行うとともに、外部機関の資料についても把握する。幕末・維新时期を中心とした京都での国学関係者の活動については、京都府立総合資料館で関係資料の調査を行う。

- II 国学に関する研究連携のための組織づくり

学内のさまざまな国学研究プロジェクト間での研究関係情報の共有を目指して、平成二十三年度に開始した国学研究会について、本年度も数回開催する。本年度からは、国学関係の研究を行う学内の教員に参加を呼びかけるとともに、学外の有志の研究者にも広報・告知を行う。研究会の成果についても、ウェブなどによって広く学外への周知を図る。

学術資料館 平成二十四年度事業計画① 考古学資料館収蔵資料の再整理・修復・研究・公開

深澤 太郎



I 事業の概要

昭和三十(一九二八)年の開館以来、当館が収集してきた資料は、約十萬点に及び、台帳登録数も六千件を超えた。しかしながら、創設から八十年以上を経過する中で、国・地方自治体・本学関連法人に移管した収蔵品や、管理上の混乱を来した資料も少なからず認められる。

そこで、平成二十(二〇〇八)年度より、台帳の改訂と、目録の編纂を目指して、悉皆的な列品確認を開始した。また、纏まった館蔵品の調査・研究は勿論、経年劣化した資料の修復や、新しい展示コンテンツの開発も併せて実施している。とりわ

け、平成二十二(二〇一〇)年度までの三ヶ年計画では、縄文時代の大形石棒に焦点を当てたサブプロジェクトを立ち上げ、関係する館蔵資料の再整理や、シンポジウム『縄文人の石棒―大形石棒にみる祭儀行為―』などの研究事業を行ってきた。もともと、主要業務である列品確認等については、なお時間を要するところであり、平成二十三(二〇一一)年度以降も事業を継続して現在に至っている。

II 事業推進の組織体制

昨年度末を以って、当館と共同で館蔵品研究を進めてきた伝統文化リサーチセンター事業が終了した。そのため当館では、同センター設立の理念を引き継ぐと共に、「資料収集」・「整理保管」・「調査研究」・「教育普及」といった博物館機能を具現化するため、考古学部門の構成員・臨時雇員を、総務掛・学芸掛・資料掛に編成し、館務全般の円滑化を図ることとした。

このうち、主に当事業を推進する学芸掛には、先史資料班・原史資料班・有史資料班・外国資料班・民俗資料班・寄贈資料班を設けている。所管する資料の整理・保管・展示や、調査・研究に係る責任の所在を明確にすることで、組織的・合理的な事業運営の実現が期待されよう。

III 今年度の主な達成目標

(一) 『収蔵品台帳』の改訂

受け入れ順に館蔵品を列記した『収蔵品台帳』は、概ねデジタルデータ化が終わっているが、資料を登録した時点での遺物出土地名を、改めて現在の地名に変換する必要がある。また、館蔵品の出土地には、埋蔵文化財包蔵地として遺跡地図に登録されている箇所もあるため、遺跡名の比定も進めてきた。大字単位での再確認については、約二二〇〇件の戦前登録資料まで仮改訂が終了している(五月上旬現在)。

今年度は、戦後登録資料についても、同様の作業を実施する。また、戦前登録資料に関しては、複数人による再チェックと、小字単位での現地比定を深めていく。

(二) 『収蔵品目録』の編纂

館蔵品を管理する上では、このような『収蔵品台帳』の整備が至上課題である。しかし、一歩進んで館蔵品を研究・活用するためには、それらを出土地域・遺跡毎に排列した『収蔵品目録』の編纂・公開が欠かせない。

今年度は、ここ数年に亘って実施してきた『収蔵品台帳』改訂の進捗を受けて、収蔵庫内に分散保管されてきた考古資料を、出土遺跡単位(或いは出土地域単位)に再統合する作業を開始する。かかる作業によって、単独の考古遺物を、纏まった学術資料として取り扱うことができるようになるであろう。なお、既に作業の過程で、『収蔵品台帳』の記載事項と、実際の資料に齟齬のある事例

も見つかってきた。このような点についても、入念な検証を行い、新たな『収蔵品目録』や、それに基づく『図版目録』の編集に反映させていく予定である。

(三) 収蔵品の研究

これらの作業の進捗によって、考古学的研究や、平常展示・企画展示にも活用可能な、重要資料の存在が明らかになってきた。その内、静岡県洗田遺跡出土遺物など、祭祀遺跡関連資料については、既に過年度から整理を開始している。

ところで、旧制鞍山中学校所蔵資料(梅本俊次寄贈資料)に関しては、昨年度末に確認した『鞍山中学校歴史研究室蒐集品目録』によって、『収蔵品台帳』の不備を補完できることが明らかとなった。そこで今年度からは、北東アジア考古学研究に活用できる同資料群も、重点的な研究対象として取り上げることとした。

また、考古資料のみならず、過去の図書類や事務書類等も整理しており、未報告資料の関連情報が集積されてきた。加えて、当館で蓄積してきたデジタル画像データも集中的に管理するなど、収蔵品の資料価値を高める取り組みを推進する。

(四) 展示コンテンツの開発

新しい展示コンテンツとしては、かねてより縄文原体展示の整備を進めており、復原縄文原体の製作は順調に推移してきた。但し、館蔵資料のみによって必要な縄文土器片を充足することは難しい。そこで、広く地方公共団体の協力を得て収集に努め、不足資料の補填を試みていく。

学術資料館 平成二十四年度事業計画② 近代学術資産の資料化と地域連携活用に関する研究

小川直之

研究目的

本プロジェクトの目的は、本学が所蔵している画像資料を中心とする学術資料のデジタル化とデータペーシ化を進め、その成果をもとにする地域連携のあり方についての研究を進めることにある。

創立一三〇周年を迎える國學院大學には、創設以来学内に集積してきたさまざまな学術資料がある。ここでいう近代学術資産というのは、明治十五年の創立から集積されてきたこうした研究・教育を目的とする諸資料のことである。対象とする資料は、本プロジェクトは平成十一年度から十七年度まで実施した学術プロジェクト推進事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」を引き継いでいることから、画像資料を中心としている。

後述するように対象資料は、画像資料とその関連資料であり、これらのデジタル化と目録化を行って公開のための基盤整備を進めている。こうした作業が「資料化」ということである。そして、「地域連携活用」というのは、資料化を行った諸資料を社会化することで、当該資料の原所在地の自治体等と連携しながら活用の可能性を探ることを目指している。

対象資料は、具体的には柴田常恵資料と宮地直一博士収集神社絵葉書

資料である。

柴田常恵資料

我が国の文化財保護行政の確立に大きな役割を果たした柴田常恵の資料については、すでに写真資料目録I・II、拓本資料目録などを刊行している。写真資料は目録化とともにデジタル化も完了しており、これは本学デジタル・ミュージアムでも公開している。

今次プロジェクトでは、柴田資料の瓦拓本資料二七六三三のデジタル化、学術資料館考古学部門所蔵の柴田資料の整理、柴田による調査記録(野帳)の整理と記載内容の研究を予定している。

瓦拓本資料は目録が完成しており、二十三年度には目録に沿って個別資料の情報整備と採寸などを行ったので、二十四年度にはデジタル化作業を進めるとともに、このうちのいくつかのまとまった瓦拓本資料について、原所在地の自治体や資料館との連携検討を予定している。

また、柴田資料には八十六冊の野帳が残されており、その整理を二十三年度から行っており、これを二十四年度も継承する。野帳はメモ程度の記載で、その意味内容の理解は容易ではないが、二十三年度には柴田の秋田県での足跡が一部明らかにで

きており、こうした作業を二十四年度も続けたい。

柴田の収集資料は、写真や拓本などを中心とするが、瓦拓本資料には、たとえば武蔵国分寺のものがあり、この中には現在では実物が確認できないものもある。すでに整理が済んでいる梵鐘拓本については、戦時中に供出された梵鐘のものもある。このように地域資料としては貴重なものが含まれていて、資料活用の地域連携が俟たれている。

宮地直一博士収集神社絵葉書資料

宮地直一博士が収集し、本学に寄贈された神社絵葉書は、二三五六集、一万四五〇余点がある。個人による神社絵葉書コレクションとしては、その点数・範囲の上で有数なものと思われる。

絵葉書の整理、デジタル化は、学術フロントエリア推進事業時に折口信夫による歌舞伎絵葉書コレクションの整理等を行っており、この作業で蓄積されたノウハウがもたれている。

神社絵葉書のデジタル化は、九州から始めて二十三年度までに中部地方まで完了したので、二十四年度は関東地方以北を進める。併せてこのコレクションのデータベース化を進める計画である。データベースも九州から中部地方まで完了しており、これもデジタル化同様関東以北の作業を行う。

二十四年度は、この資料の活用に関する地域連携のあり方を模索する意味も含めて、まとまった絵葉書が存在する神社について、景観の現状

との比較、絵葉書にある祭礼や神事の現状確認などの実地調査を行う予定である。実地調査を行うことで、多様な地域連携が可能なようにする意図である。

神社絵葉書についてはさまざまな活用が考えられ、その一つに神社資料検索のインデックスとしての活用を考えているが、祭礼・神事の現状との比較などは、絵葉書画像の学術資料としての可能性を探るものでもある。

絵葉書については、こうした作業と並行して、絵葉書の発行と普及に関する地域研究を二十三年度から進めている。絵葉書の歴史と普及については、国内の概要は明らかにしているが、発行所についての地域的詳細などは手つかずの状況であり、広島県を例にして絵葉書販売所など流通経路や販売の実態の調査研究を行っている。二十四年度もこの調査を継続し、より詳細な実態を把握したい。

成果の公開について

本プロジェクトは、二十三年度から二十五年までの三ヶ年計画であり、二十四年度が中間年となるので、今年度は最終的な成果公開を見据えた活動を行いたい。具体的には①柴田・宮地資料の活用としての地域連携の具体化、②画像資料の公開の見通しの検討、③宮地博士絵葉書資料目録の刊行にむけての準備、④研究成果の公開としての『人文科学と画像資料研究』刊行にむけての準備などである。

学術資料館 平成二十四年度事業計画③ 伊豆諸島における在地信仰の考古学的研究

内川 隆 志



I 事業の概要と目的

かねてより伊豆半島・伊豆諸島の古代から近現代に至る祭祀関係遺跡を重点的な研究対象と定め、大島和泉浜遺跡C地点、利島阿豆佐和気命神社境内祭祀遺跡など、重要遺跡の発掘調査や、和鏡等をはじめとする出土・伝世資料の資料化を推進してきた。これらの事業では、周知の遺跡、神社・寺院境内や、既知の資料を主たる対象としてきたが、八丈小島の鳥打・宇津木遺跡の発掘調査、あるいは三宅島における積石塚の分布調査を実施する中で、これまで遺跡としての認識が希薄であった小祠

や、伴出する埋蔵文化財についても具に検討することが、当該地域における信仰文化の解明に当たって有効であるとの認識に至った。これまで伊豆諸島域における中近世の祭祀遺跡について、考古学的研究成果の学際的視点での研究は少なく、特に注目されることもなかった。しかしながら、祭祀を支える施設造営、モノの評価、マツリの構造、さらには本土からの神社信仰と黒潮を介した琉球、南西諸島の要素などについて興味深い課題が山積しており、我が国の神社信仰の基層を考える上で看過できない地域であることを再認したのである。昨年度のORC事業における八丈島、青ヶ島の調査からも、これまで遺跡としての認識が希薄であった神社や、伴出する埋蔵文化財についても詳細に検討することが、当該地域における信仰文化の解明に当たって有効であることを確信したのである。

とりわけ、主に神社に残る小祠等の分布調査を実施することによって、埋蔵文化財保護のための基礎的空間情報を収集するとともに、それに伴う考古資料の年代観を検討していくことで、伊豆地域における民間信仰の実態を明らかにしていくことができるものと考えられる。もちろん、その考古学的成果は、重層的に折り

重なった信仰遺跡の最表層を窺うものに過ぎないが、現代における民俗文化の形成・変容過程に関する研究とも接続していくことが可能となるのである。

II 事業内容

単年度での事業であるため、これまで考古学資料館における学術調査や考古学研究室における研究成果、加えてORC事業によって蓄積されたデータをベースに、大島・神津島・御蔵島など特に情報の希薄な地域を重点的に調査し、既存データを補完することとしたい。

その具体的方法であるが、特に詳細分布踏査による情報収集、GPS等による地理学的データの収集、博物館、資料館等の施設に集積されている資料の調査、写真撮影、実測図作製、地元有識者からの聞き取り調査、図書館等における文献渉猟などを行ない、さらに黒潮圏域における文化比較のため、琉球、南西諸島域における関連遺跡、遺物の調査などを実施する。調査は、昨年度までにORC第1グループで行なってきた伊豆諸島での石信仰関連遺跡・施設等の調査成果を踏まえ、南西諸島との比較分析を行なうためのデータ収集を目的とする。沖繩本島と八丈島からの移民が多い南大東島を対象に、神社・御嶽・拝所などに残る小祠等の分布調査・GPS測量・聞き取り調査・現地での文献収集、島内の御嶽・拝所と推定されている遺跡の踏査による遺跡の地理的環境の把握、博物館等の施設にある資料調査などを行なう。

具体的には、沖繩本島では、斎場御嶽・浜川御嶽・場天御嶽・友利御嶽・沖繩御嶽・上クスク之嶽・場天御嶽・中間之御嶽・中間之御嶽・浜元神社・友利御嶽他・クシヌウタキ・稲福遺跡、県立博物館・恩納村博物館・名護博物館・那覇市立壺屋焼物博物館などで調査、南大東島では、大東神社・秋葉神社・琴比羅宮他、南大島村ビクターセンター島まるごと館・ふるさと文化センターなどである。

III 研究達成目標

これまで大島・利島・新島・式根島・神津島・三宅島・八丈島・八丈小島・青ヶ島において実施してきた神社・寺院境内地や小祠等の調査に加え、御蔵島においても、かかる目的・方法による研究事業を展開することとしたい。

また、伊豆諸島と密接に関係する琉球、南西諸島域における比較研究を合わせて実施するため、①町史・村史関係資料に基づく事前調査、②現地における分布調査(主に神社・寺院境内、及び小祠・塚など)、③調査成果の考古学的検討(時間的・空間的研究)、④調査成果の歴史学・民俗学・歴史地理学的研究(考古学的研究成果の学際的評価)を実施するものであり、具体的な研究目標としては、先に提示した方法によって得られた新たな評価を附した詳細情報の開示を目指すものである。成果の公開に関しては公開研究会やフォーラム、成果報告書、インターネット等を予定している。

学術資料館 平成二十四年度事業計画④ 神道祭祀の資料論的研究と関連資料の整理分析

加瀬直弥

事業のねらい

ここで概要を紹介する事業「神道祭祀の資料論的研究と関連資料の整理分析」は、平成二十三年度に開始し、現在も遂行中(事業完了は平成二十五年度の予定)の、学術資料館神道資料館部門(神道資料館)の事業である。本事業は神道資料館の中心的活動とすべきものであり、そのねらいも、資料館の目的達成に密接に関係する。すなわち、神道に関する研究と、神道資料館をはじめとした、本学所蔵神道関連資料の学術的意義の解明を行ない、伝統文化リサーチセンター資料館での展示等による公開に成果を反映させることに、その目的がある。

本事業は、同目的で平成二十年度から二十二年度まで実施していた「神道資料の整理公開と学術的価値の探求」を継承するものであるが、研究活動の一層の促進に留意したところに、その大きな特色がある。以下、事業の具体的な概要と、今後の見通しについて述べていきたい。

事業の概要(一)祭祀の歴史的研究と関連資料の収集

神社祭祀は神社ごとに特色を有するものであるが、多かれ少なかれ、古代から行なわれている神祇祭祀の歴史的経緯と関係がある。そこで、

神社の歴史に関連する調査を実施し、研究活動に資する情報の収集を進めた。

現時点での活動は、古代神社の実態把握が中心である。これまで、伊勢の神宮(三重県)の周辺域や九州北部において神祇信仰に関する情報収集を行ない、古代社会における神社の維持基盤等に関する知見を得ることにつとめた。今後も神社の立地環境や、神仏関係についても検討することを計画している。

こうした調査等は、展示に資する資料の収集活動とも密接に関わるものである。収集の対象そのものは、祭具の現物や前近代の絵画等が中心であるが、本事業の研究活動に反映させるため、その進捗に応じ、考古遺物等の複製を計画している。

事業の概要(二)学内神道関係資料の紹介

今述べた調査とともに、すでに学内に所蔵された神道関係資料を広く紹介する活動も、本部門における重要なものと位置づけ推進している。平成二十三年度は、神社祭祀の様子を描いた前近代の絵巻に注目し、國學院大學神道資料館報「十二号」で、学内所蔵品のほとんどについて、その概略を広く紹介した。

事業の概要(三)伝統文化リサーチセンター資料館における展示

國學院大學学術メディアセンター棟にある伝統文化リサーチセンター資料館には、神道資料専用の展示空間がある。従来も神道資料館において、展示の基本計画策定への参画や、展示資料の提供など、資料館の展示活動に間接的な寄与を果たしてきたが、今後も、本事業の成果などを反映させつつ、展示活動の推進につとめる予定である。



伝統文化リサーチセンター資料館
神社祭祀に見るモノと心 展示スペース

事業の概要(四)その他の活動

本事業においては、神道の現状把握に資する調査等にも携わった。平成二十二年より研究開発推進機構は、神社本庁と共同で、全国神社を対象とした「神社祭祀と御神木に関する調査」を推進してきたが、この集計・基礎的分析作業については本事業が関係する形で進められた。この成果の概要は、平成二十三年度末刊行の報告書『神社と御神木・社叢』で、写真や図版などを用いて紹介さ

れているが、御神木や社叢、さらに神社祭祀に祭具として用いられる樹木に関するさまざまな特質を、数量的に裏付けることができた。

この調査は、神社境内にある御神木等や社叢の樹種や、それにまつわる伝承などを対象にしたものである。この調査で明らかになったこととしては、(一)御神木等になっていく樹種を地域ごとに分類すると、自然の植生にほぼ対応していること、(二)船や建物の材木として古くから用いられてきたスギやクスノキが、御神木としても社叢としても多くを占めていること、(三)樹齢が短く、代を重ねている御神木がある程度存在していること、(四)社叢を構成する樹種としては、スギやクスノキの他、日本の花を代表するサクラや、神道ないしその祭祀を象徴するサカキが多いこと、(五)玉串・大麻・神籬に用いられる樹種はサカキが多いが、寒冷地等、サカキが自生しない地域については、地域によって独自の樹種を用いること、等が挙げられる。

こうした他機関との活動などについては、今後も必要に応じ受け入れることで、社会貢献を果たしていきたい。



『神社と御神木・社叢』

校史・学術資産研究センター 平成二十四年度事業計画①

國學院大學における大学アーカイヴズと

自校史教育の構築と展開

齊藤 智朗

事業の目的

本事業は、校史資料の収集や保存、また校史の研究を通じて得た成果を機関誌等で公開していくとともに、特に本学における自校史教育の基盤形成に重点を置くものである。本事業では、学内の関係機関・部署と連携・協働して、本学の自校史教育用の教材の作成や、自校史への理解度及び当該教材に関するアンケートの実施と報告書の作成等を行ない、本学の学部教育やFD (Faculty Development) 活動の上で活用していくことを目的とする。

事業概要と既往の成果

本事業は、自校史研究や校史資料の収集や保存作業をはじめ、学内の関係機関・部署と連携・協働して、特に自校史教育に関連する作業の積極的な展開を図るものである。具体的には教養総合「神道科目」における自校史教育用テキストや、当該テキストに関するアンケート及び報告書等の作成を行なう。

本センターでは、平成二十年度以降、神道文化学部と、教学事務部教務課ないし教育開発推進機構共通教育センターと連携して、教養総合「神道科目」において共通で行なう「皇典講究所・國學院創立の経緯と建学の精神Ⅰ・Ⅱ」の『建学の精神と國

學院大學の歩み―渋谷移転まで―」を作成・改訂し、当該サブテキストに関する学生へのアンケートも合わせて実施してきている。平成二十三年度は、計二、二二八通（前期一、五一六通、後期七二二通）のアンケート用紙を回収して、集計を行なった。

平成二十四年度は、本学創立百三周年を迎えることもあり、かつこれまでのアンケート結果を反映させたかたちで、新しい自校史教育用サブテキストである『國學院大學の百三十年』（教育開発推進機構共通教育センター発行）を作成した。

また、校史資料の整理・収集や、学内外からの自校史に関する問い合わせへの対応、あるいは校史資料の学外への貸し出し業務を日常的に行なった。ことに平成二十三年度は、徳川美術館・名古屋市蓬左文庫・中部日本放送・中日新聞社主催による展覧会「宮廷の雅―有栖川宮家から高松宮家へ―」にて、本学所蔵の有栖川宮コレクションの一部が展示された。

本事業における教員・研究員による研究成果としては、本センターの機関誌である『國學院大學校史・学術資産研究』第四号（平成二十四年三月刊）に、阪本是丸「國學院の「国学」―「非常時」に於ける河野省三・折口信夫・武田祐吉の国学―」、宮部

香織「國學院における三浦周行の法制史講義」の二本の論文を掲載した。加えて、本センター所蔵の校史資料を活用した研究として、伏見稲荷大社発行の『朱』第五十五号（平成二十三年十二月刊）に、齊藤智朗「高山昇と皇典講究所」を発表した。また、本学の歴史や所縁のある人物にまつわる記事等をまとめたパンフレット『校史』第二十二号（平成二十四年三月刊）を編集・刊行し、堀口裕美子「蘭学者の家に生まれた國學院生―第四期生 青地愛作の資料

―」、益井邦夫「国文学者歌人金子元臣教授」、齊藤智朗「高山昇翁歌碑」の各小論を掲載した。

平成二十四年度の計画

平成二十四年度は、新たに作成した自校史教育用サブテキスト『國學院大學の百三十年』の授業での使用が開始されるにともない、当該サブテキストに関する学生へのアンケートも行なう、その結果を踏まえた今後の自校史教育のあり方に関係機関・部署と引き続き検討する。



教養総合「神道科目」サブテキスト『國學院大學の130年』（左）
『校史』第22号（右）

校史・学術資産研究センター 平成二十四年度事業計画②
國學院大學における学術資産研究の発展と公開

齊藤 智朗

事業の目的

本事業は、本学図書館（以下、図書館）と協働して、本学の学術資産を研究し、その成果を図書館のウェブサイトに上げるデジタルライブラリーで公開し、さらに貴重書等に関する目録の編纂を行なうものである。

事業概要と既往の成果

本事業では、二つの作業を行なう。まず一つは既存のデジタルライブラリーに掲載されている資料に解説を付す「補充」および学術的な価値の高い資料を新たに掲載する「追加」の作業である。もう一つは図書館所蔵の貴重書等に関する目録の編纂作業であり、具体的には、中世散文学解題目録と中近世史書書誌目録を作成し、平成二十五年度の完成を目指す。これら両作業を通じて、本センターの兼任教員は、研究員等に研究指導を行ない、若手研究者の育成を図る。

平成二十三年度は、「補充」作業が四十四点、「追加」作業が十一点の、計五十四点の資料に関する解説等を公開した（別表参照）。解説等の執筆には、他機関の研究者や本学の文学専攻の大学院生による助力・協力も得た。貴重書等に関する目録の編纂については、作成作業に着手し、調

査・採録する予定の典籍のうち、両目録ともおよそ半分の調査を終了した。

本学の学術資産に関する研究論考としては、本センターの機関誌である『國學院大學校史・学術資産研究』第四号（平成二十四年三月刊）に、針本正行・山本岳史「國學院大學図書館所蔵『羅生門』の解題と翻刻」、松尾葦江「平家物語と絵巻資料研究―國學院大學所蔵資料を中心に―」、伊藤慎吾「國學院大學図書館所蔵『徒然草』版本類解題」、畠山大二郎「國學院大學図書館蔵『清輔本金葉和歌集』の解題と翻刻」、山本岳史「國學院大學図書館所蔵奈良絵本『田村の草子』解題と翻刻」、清水正彦「庄内藩佐藤氏旧蔵天保改革期前後『見録』―概要紹介と巻一（三方領知替一件関係）翻刻―」の六本の論文ないし資料翻刻・紹介を掲載した。

平成二十四年度の計画

昨年度に引き続き、デジタルライブラリー掲載の典籍・資料の「補充」「追加」の作業と合わせて、貴重書等に関する目録の作成・編集を行ない、これら作業を通じて得た新たな知見は、本センターの機関誌等で発表する。

平成二十三年度デジタルライブラリー解説 補充分・追加分一覧

【補充】

カテゴリー	書名	図書番号
1	1. 神道文化関係	沙石集 貴2423-2432
2	2. 奈良絵本・絵巻物関係	磯崎 貴280
3	2. 奈良絵本・絵巻物関係	ものくさ太郎 貴110
4	2. 奈良絵本・絵巻物関係	竹取物語絵巻 貴1870-1872
5	2. 奈良絵本・絵巻物関係	住吉物語（甲本） 貴3071-3072
6	2. 奈良絵本・絵巻物関係	住吉物語（乙本） 貴2530
7	3. 古今和歌集	古今和歌集 貴3008
8	4. 新古今和歌集	新古今和歌集 貴2284-2285
9	4. 新古今和歌集	新古今和歌集 091.2/911.145/3
10	4. 新古今和歌集	新古今和歌集 091.2/911.145/1
11	5. その他の勅撰集類	後撰和歌集 貴3484
12	6. 私家集・類題集・歌合関係	風葉集抜書 貴1855
13	6. 私家集・類題集・歌合関係	山家集 異本 貴II-8
14	8. 上代文学関係	古事記 梵舜本 貴51-56
15	9. 物語文学・日記文学・随筆文学	いせもの語 091.2/913.32/Sa64
16	9. 物語文学・日記文学・随筆文学	伊勢物語 091.2/913.32/1
17	9. 物語文学・日記文学・随筆文学	伊勢物語 貴781-782
18	9. 物語文学・日記文学・随筆文学	源氏物語 花宴 河内本 貴2699
19	9. 物語文学・日記文学・随筆文学	源氏物語（寄合書） 貴986-1010
20	9. 物語文学・日記文学・随筆文学	伊勢物語 091.2/913.32/3
21	9. 物語文学・日記文学・随筆文学	いせものがたり 091.2/913.32/2
22	9. 物語文学・日記文学・随筆文学	竹取物語 913.31/11
23	11. 軍記物語関係	曾我物語 091.2/913.471/1
24	11. 軍記物語関係	曾我物語 貴1880-1891
25	13. 武鑑類	御役人附早見 安政四年 貴3363
26	13. 武鑑類	御役人附早見 安政五年 貴3364

27	13. 武鑑類	御役人附早見 文久二年 貴3365
28	13. 武鑑類	御役人附早見 文久三年 貴3366
29	13. 武鑑類	会計便覧（年欠） 097/281.035/5
30	13. 武鑑類	会計便覧 安政六年 097/281.035/4
31	13. 武鑑類	会計便覧 嘉永二年 貴3391
32	13. 武鑑類	日光御宮御参詣供奉 天保十三年 097/175.9/To72/1
33	13. 武鑑類	日光御宮御参詣供奉 天保十四年 097/175.9/To72/2
34	13. 武鑑類	縣令集覧 天保十五年 貴3383
35	13. 武鑑類	縣令集覧 弘化二年 貴3384
36	13. 武鑑類	縣令集覧 嘉永二年 貴3385
37	13. 武鑑類	縣令集覧 嘉永二年 貴3386
38	13. 武鑑類	縣令集覧 嘉永五年 貴3387
39	13. 武鑑類	縣令集覧 安政七年 貴3388
40	13. 武鑑類	縣令集覧 文久元年 貴3389
41	13. 武鑑類	袖珍有司武鑑 慶應元年 097/281.035/1
42	13. 武鑑類	縣令集覧 慶應二年 097/281.035/1
43	13. 武鑑類	縣令集覧 文久三年 貴3390
44	13. 武鑑類	日光御宮御参詣供奉御役人附 貴3382

【追加】

カテゴリー	書名	図書番号
1	2. 奈良絵本・絵巻物関係	大江山酒吞童子絵貼交屏風 貴4206
2	2. 奈良絵本・絵巻物関係	平治物語 常盤之巻 貴1562
3	2. 奈良絵本・絵巻物関係	舟のみとく 貴4201-4202
4	6. 私家集・類題集・歌合関係	和漢朗詠集 貴3512-3513
5	9. 物語文学・日記文学・随筆文学	徒然草寿寿院抄 貴594-595
6	10. 平家物語	平曲譜本（波多野流） 768.3//5
7	12. 史学・法制関係	島津藩勇士御武鑑 貴2749
8	12. 史学・法制関係	柳野群載 貴81
9	12. 史学・法制関係	柳枝管 天保五年 貴3392
10	12. 史学・法制関係	毛利輝元書状集 貴1696

研究開発推進センター 平成二十四年度事業計画 研究開発推進センター研究事業

遠藤 潤

事業の目的

研究開発推進機構は、國學院大學が策定した「國學院大學二十一世紀研究教育計画」に基づき、研究教育活動の重点的推進及びその成果の発信を目的として設置された。研究開発推進センターは、この機構全体の事業の円滑な運営を図るとともに、國學院大學二十一世紀研究教育委員会によって策定される研究教育事業を推進し、その成果をもって社会貢献を果たすことを目的としている。本センターによる「研究開発推進センター事業」は、二十一世紀研究教育計画委員会策定の二十一世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」における研究事業を継承し、建学の精神である神道・日本文化の研究をさらに発展させることを目的とする研究事業であり、以下の各項目について進める。

(ア) 神道・国学に関する近代・現代の研究状況の理解及び特徴ある時期における神道と社会に関する研究
(イ) 学内各機関に所蔵される学術資産のうち、神道・国学に関する資料の全体像の把握及び特定のテーマを設定した、学内学術資産に基づく研究
(ウ) 日本人の靈魂観を解明するための、戦没者慰霊と追悼の歴史的变化

遷とその意味の解明

(エ) 国内外の神道及びその関連領域の研究者・研究機関との連携関係の強化

平成二十四年度の計画

先述した(ア)～(エ)の目的を達成するため、以下の研究活動を行う。

(1) 「昭和前期における神道・国学と社会」についての研究では、関係する基本文献の読書会を行うとともに、当該テーマについて、大正期以降の神社制度と官僚、昭和前期の神道・国学と社会の関係、同時代の國學院大學史も含めた国学史・国学研究史の再検討などの研究活動を実施する。

(2) 日本人の靈魂観の研究では、平成十八年より続けてきた「慰霊と追悼」研究会における、招魂と慰霊の系譜に関するこれまでの研究成果を集約した報告書として、単行本を刊行する。

(3) 神道・国学に関する学内資料の調査研究では、国学関連人物データベースの訂正・補足作業、図書館、各学部、研究開発推進機構および機構各機関が所蔵する神道・国学に関する資料についての調査・研究を行う。

(4) 神道・日本文化研究の国際比較

と国内外の研究者間の連携強化では、平成二十三年度より星野靖二・研究開発推進機構助教をハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所に客員研究員として派遣し在外研究を行っているが、本年度もこれを継続する。また、ハーバード大学に神道・国学研究者を派遣し、国際研究ワークショップを企画・開催するほか、神社界とも連携しつつ、神道・国学に関する調査・研究を進める。

(5) 研究開発推進センター研究会では、上記(1)～(4)をはじめとする研究事業について、センターの構成員を核とし、機構構成員や学部教員、客員教授・共同研究員として参画する関連研究者、さらに関心をもつ研究者一般の参加を募りながら議論を行う。

(6) 「研究開発推進センター研究紀要」を刊行する。

本事業の特色

本事業の学術的な特色は、これまで本学で培ってきた国学的研究、すなわち精緻な文献等資料の考証に裏打ちされた総合的日本文化学を目指すところにある。具体的には、機構内の各共同研究機関はじめ各部署との連携・調整に基づいて、学内の神道・国学関係学術資産の全体像と研究状況を把握すると共に、また戦前の神道・国学と社会の関係を焦点として多角的・実証的にその歴史的事実の理解を深めてゆく。このことにより、近代日本における神道・日本文化のあり方、それに対する人文

科学の取り組みのあり方の解明、本学の学術的使命に即した研究方法の開発を可能とするものである。また、これらの成果を踏まえながら、学内に集積されてきた学術資産や研究情報の活用・公開をより効果的に進めるために体制を整備するとともに、研究事業成果の国際的な発信を行う。



研究開発推進センター 平成二十四年度事業計画 二十一世紀研究教育計画委員会研究事業 地域・渋谷から発信する共存社会の構築

菅 浩二

事業の目的

本事業は、國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会の決定に基づき、研究開発推進センターのマネジメントにより実施されて来た「渋谷学」と「日本発・共存社会モデル構築による世界貢献(共存学)」両プロジェクトを統合して設けられた学際共同研究事業である。本事業は建学の精神の学術的な具現化と、本学の特色を活かした地域貢献・社会還元を「共存社会」をキーワードとして追求するものであり、学内の全学部にわたり連携研究者を擁して進められる。

またこの過程で「共存社会の構築」という視点から、本学が蓄積してきた研究成果を集約・再評価し、それらの成果を生かした教育、より複合的視角で「共存」の問題にアプローチする研究者の育成、を行う。

事業概要と既往の成果

統合事業としての本研究は、まず平成二十三年度に単年度事業として開始した。三年間の継続研究計画としては本二十四年度が初年度となる。

理念型に先立つ原基的形態であり、より創造的な関係性構築への可能性を含む存在様式である「共存」に関わる現象は、様々な社会の局面で観察される。本事業では合同研究

会議等の準備協議を通じ、研究対象として四つの領域を階層的に設定した。

I 渋谷：渋谷を中心とした東京の都市形成史と都市的現実

II 地域(農山漁村)：地域社会の共同性・持続可能性

III 日本：日本の伝統文化や現代社会における共存の知恵の検討

IV グローバル化する世界：地球規模での共存社会の可能性

その上で、従来の「渋谷学」「共存学」両プロジェクトを基にしたグループが、それぞれ領域IおよびII・III・IVを主担当しつつ課題意識を共有すること、領域横断的な検討を進めること、を定め、組織再編を図った。二十三年度における両グループの成果概要は以下の通りである。

【渋谷学グループ】

渋谷区政関係者への聞き調査、金王八幡宮祭礼調査、松濤地区の旧鍋島藩邸に関する佐賀県での文書調査、を実施した。作家・平岩弓枝氏講演会、外部研究者を交えた渋谷学研究会・シンポジウム各一回を開催し、「地域渋谷」への多角的アプローチを行った。また、総合講座「渋谷学」全十四回において参加研究者が講師を務めたほか、「渋谷学ブックレット三」及び『都市民俗研究』を刊行し、成果を公開した。

【共存学グループ】

東日本大震災被災地を含め、岩手県・宮城県で、相互支援と共存社会構築の観点から聞き調査を行った。打合せ会議と共存学研究会を各五回実施し、またシンポジウムを共生社会システム学会と共催して、学際的・領域横断的な課題設定について討議した。さらに事業全体の課題である「共存社会」像をより明確に結ぶべく、これまでの研究成果を書籍『共存学・文化・社会の多様性』(弘文堂)として刊行した。



『共存学：文化・社会の多様性』



『渋谷学ブックレット3 渋谷を描く』

平成二十四年度の計画

本年度は、種々のものが共存する都市渋谷、及び諸々の地域社会から、日本、グローバル社会に至る具体的事例の遠近法を基に、試行的な共存社会モデルを抽出する段階に当たる。この作業過程で対象の階層性を踏まえながら、従来のグループを越えて成果の整理分析を行い、より横断的な協議を深めてゆく。

具体的活動としては、領域Iではエクステンション事業課による創立百三十周年記念・地域連携講座「渋谷学—今と昔とこれからと—」に協力し、成果の地域還元を進める。また『渋谷学叢書 三』、渋谷学ブックレット、『都市民俗研究』を刊行する。領域II・IIIでは、国内地域の共同性、宗教文化、環境、街おこし、歴史と近現代等の複合的観点から、研究を積み重ねる。領域IVでは、中国より研究者を招き、研究会「東アジア地域の共存を考える」を開催するほか、地球規模での持続可能性についても内外の動向を視野に含めて検討する。

これらの活動と共に、関連学術情報の実践的集積と多面的検討により試行的なモデル抽出作業を進め、次年度以降の、具体的な社会貢献と教育への還元の状態を模索する。

平成24年度 研究開発推進機構 事業計画及び人事一覧

平成24年6月1日現在

機関	研究事業名	専任教員	兼任教員	客員研究員	ポストドク研究員	研究補助員	客員教授	共同研究員
日本文化研究所	デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開 (H22 - H24)	平藤喜久子 星野靖二 塚田穂高	*井上順孝 ハイヴンズ, ノルマン 黒崎浩行 齊藤こずゑ	市川 収 フレール, チャールズ 市田雅崇	李 和珍 ガイタニディス, ヤニス 加藤久子	今井信治	ナカイ, ケイト 土屋 博 星野英紀 山中 弘	チョジック, マシュー キロス, イグナシオ 小堀馨子 シッケタンツ, エリック 高橋典史 ビュテル, ジャン=ミシェル 山梨有希子 天田顕徳 齋藤知明 村上 晶
	「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の構築 (H23 - H25)	*遠藤 潤	松本久史		小林威朗	小田真裕 武田幸也	林 淳	一戸 涉 三ツ松誠
学術資料館	考古学資料館収蔵資料の再整理・修復・研究・公開 (H23 - H25)	内川隆志 深澤太郎	*吉田恵二 柳田康雄 青木 豊 中村耕作	土屋健作				粕谷 崇 阿部常樹 俵 寛司 伊藤博司 中村 大 村松洋介 阿部昭典 加藤元康
	近代学術資産の資料化と地域連携活用に関する研究 (H23 - H25)	内川隆志 加瀬直弥 深澤太郎	*小川直之 黒崎浩行		田中秀典 齋藤しおり			新原佑典 石川岳彦
	伊豆諸島における在地信仰の考古学的研究 (◎ H24)	内川隆志 深澤太郎	*吉田恵二 青木 豊 中村耕作		石井 匠			栗木 崇
	神道祭祀の資料論的研究と関連資料の整理分析 (H23 - H25)	加瀬直弥	*笹生 衛 岡田莊司	池谷浩一			山本信吉	鈴木聡子
校史・学術資産研究センター	國學院大學における大学アーカイブズと自校史教育の構築と展開 (H23 - H25)	齊藤智朗	*阪本是丸	宮部香織 渡邊 卓			益井邦夫	
	國學院大學における学術資産研究の発展と公開 (H23 - H25)	齊藤智朗	*阪本是丸 岡田莊司 千々和到 根岸茂夫 針本正行 松尾葦江	堀越祐一 高見澤美紀	畠山大二郎 山本岳史			遠藤珠紀 金子 拓
研究開発推進センター		遠藤 潤 齊藤智朗 菅 浩二 加瀬直弥 森 悟朗 中野裕三 宮本誉士 大東敬明	*阪本是丸 太田直之 藤田大誠 中山 郁 藤本頼生	堀越祐一			赤澤史朗	坂井久能 津田 勉 佐藤一伯 今泉宜子 大丸真美
	「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」 (◎ H24-H26)	遠藤 潤 菅 浩二 宮本誉士 森 悟朗	*阪本是丸 上山和雄 古沢広祐 藤田大誠 松本久史		冬月 律 高久 舞 筒井 裕			西俣先子 康 成文 野中規正 重村光輝
	博物館学教育研究情報センター	伊藤慎二						
学芸員（専任）		加藤里美						
学芸員（嘱託）		大東敬明（兼務） 上西 亘 石井 匠 宮川博司						

平成24年度 研究開発推進機構 人事一覧

平成24年6月1日現在

機構長	阪本 是丸
副機構長	井上 順孝
教授(兼担)	青木 豊 上山 和雄 岡田 莊司 小川 直之 齊藤 こずゑ 笹生 衛 千々和 到 根岸 茂夫 針本 正行 古沢 広祐 松尾 葦江 柳田 康雄 吉田 恵二
准教授(専任)	内川 隆志 遠藤 潤 齊藤 智朗 菅 浩二 平藤 喜久子
准教授(兼担)	太田 直之 黒崎 浩行 中山 郁 藤田 大誠 ハイヴンズ, ノルマン 松本 久史
講師(専任)	加瀬 直弥
講師(特任)	中野 裕三
講師(兼担)	藤本 頼生
助教(専任)	塚田 穂高 深澤 太郎 星野 靖二 宮本 誉士 森 悟朗
助教(特任)	伊藤 慎二 大東 敬明
助手(兼担)	中村 耕作
客員研究員	池谷 浩一 市田 雅崇 市川 収 高見澤 美紀 土屋 健作 フレーレ, チャールズ 堀越 祐一 宮部 香織 渡邊 卓
ポストドク研究員	石井 匠 ガイタニデイス, ヤニス 加藤 久子 小林 威朗 齋藤 しおり 高久 舞 田中 秀典 筒井 裕 畠山 大二郎 冬月 律 山本 岳史 李 和珍
研究補助員	今井 信治 小田 真裕 武田 幸也
学芸員(専任)	加藤 里美
学芸員(嘱託)	大東 敬明(兼務) 上西 亘 石井 匠 宮川 博司
客員教授	赤澤 史朗 土屋 博 ナカイ, ケイト 林 淳 星野 英紀 益井 邦夫 山中 弘 山本 信吉
共同研究員	阿部 昭典 阿部 常樹 天田 顕徳 石川 岳彦 一戸 渉 伊藤 博司 今泉 宜子 遠藤 珠紀 加藤 元康 粕谷 崇 金子 拓 キロス, イグナシオ 栗木 崇 康 成文 小堀 馨子 齋藤 知明 坂井 久能 佐藤 一伯 シッケタンツ, エリック 重村 光輝 新原 佑典 鈴木 聡子 大丸 真美 高橋 典史 俵 寛司 チョジック, マシュー 津田 勉 中村 大 西俣 先子 野中 規正 ビュテル, ジャン=ミシェル 三ツ松 誠 村上 晶 村松 洋介 山梨 有希子

【事務局】

学術メディアセンター事務部長	関 秀二
学術メディアセンター事務部次長	古山 悟由
学術メディアセンター事務部主幹	堀内 弘行
研究開発推進機構事務課長	杉本 久男
研究開発推進機構事務課	藤田 幸子 安西 晴美 小平 浩衣 須田 佳代 小林 信久 志水 志保 神山 幸子

彙報

※伝統文化リサーチセンターの活動については「伝統文化のモノと心」(ニュースレター)を、博物館学教育研究情報センターの活動については「高度博物館学教育プログラム」(News Letter、ウェブサイトなど)をご参照ください。

(なお、右の両センターがそれぞれ推進した、文部科学省選定の事業およびプログラムは、いずれも平成二十三年度末をもちまして完了しております。)



平成24年度 全員連絡会

会議

○全体

・平成二十三年度第二回人事委員会、平成二十四年二月二十日(月)十一時五分～十一時二十三分、若木タワー四階会議室○四

・平成二十三年度第二回教員等資格審査委員会、平成二十四年二月二十日(月)十一時三十分～十二時五分、若木タワー四階会議室○四

・平成二十三年度第四回運営委員会、平成二十四年二月二十日(月)十六時二十五分～十七時五分、若木タワー四階会議室○五

・平成二十三年度第六回企画委員会、平成二十四年三月七日(水)十一時～十一時四十五分、A M C棟五階会議室○六

・平成二十四年度全員連絡会、平成二十四年四月七日(土)十七時～十八時、常磐松ホール

・平成二十四年度第一回企画委員会、平成二十四年四月十八日(水)十一時～十一時三十五分、A M C棟五階会議室○六

・平成二十四年度第一回運営委員会、平成二十四年四月二十三日(月)(持ち回り稟議)

・平成二十四年度第一回人事委員会、平成二十四年四月二十六日(木)(持ち回り稟議)

・平成二十四年度第一回教員等資格審査委員会、平成二十四年四月二十六日(木)(持ち回り稟議)

平成二十四年五月十日(木)十六時～十六時三十分、若木タワー四階会議室○五

○日本文化研究所

・平成二十三年度第六回所員会議、平成二十四年二月二十九日(水)、A M C棟五階会議室○六

・平成二十四年度第一回所員会議、平成二十四年四月十一日(水)、A M C棟五階会議室○六

○学術資料館

・平成二十四年度第一回学術資料館会議、平成二十四年四月十一日(水)、十一時～十一時四十五分、A M C棟五階プロジェクトルーム二/四月二十四日(火)(持ち回り稟議)

○校史・学術資産研究センター

・平成二十四年度第一回校史・学術資産研究センター会議、平成二十四年四月二十日(金)(持ち回り稟議)

○研究開発推進センター

・平成二十四年度第一回研究開発推進センター会議、平成二十四年四月七日(土)十六時十五分～十七時、A M C棟一階プロジェクトルーム一

公開講座・講演会・シンポジウム・関連学会

○研究開発推進センター

・共同シンポジウム「脱成長とローカリゼーション」(共催)、平成二十四年二月十九日(日)十時～十八時、

A M C棟一階常磐松ホール、基調講演「ダウンシフトで考える脱成長社会」、講師〓辻信一(明治学院大学国際学部教授)、司会〓古沢広祐、主催〓共生社会システム学会(平成二十三年度地球環境基金助成事業)

・渋谷学シンポジウム「結節点としての渋谷―江戸から東京へ―」、平成二十四年二月二十五日(土)十三時三十分～十六時三十分、A M C棟一階常磐松ホール、報告〓岩橋清美(東京都公文書館)「幕末維新期における青物市場―青山久保町を事例として―」、吉岡孝(國學院大學文学部准教授)「幕末維新期、藩邸をめぐる人の移動―伊予西条から渋谷へ―」、松本久史(國學院大學神道文化学部准教授)「近世後期における江戸「神祇職」の集団移転―」、コメンテーター〓北原進(立正大学名誉教授)、竹ノ内雅人(飯田市歴史研究所)、司会〓根岸茂夫(國學院大學文学部教授)

出張

○日本文化研究所

・平藤喜久子「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」プロジェクトによる調査のため、大阪市・天理市、平成二十四年二月二十五日(土)～二十六日(日)

・井上順孝「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」プロジェクトによる調査のため、京都市、

平成二十四年三月九日(金)～十一日(日)

・遠藤潤・松本久史・小林威朗・小田真裕「國學院大學 国学研究プロジェクトによる調査のため、長野市・千曲市、平成二十四年三月二十一日(水)～二十二日(木)」

○学術資料館

・新原佑典「近代学術資産の資料化と地域連携活用に関する研究」プロジェクトによる調査のため、熊本県熊本市・鹿児島県鹿児島市、平成二十四年二月十七日(金)～二月十九日(日)

・齋藤しおり「近代学術資産の資料化と地域連携活用に関する研究」プロジェクトによる調査のため、広島市、平成二十四年二月十五日(水)～十八日(土)

・内川隆志・深澤太郎「出雲地域における祭祀遺跡に関する学術調査」プロジェクトの調査報告書納本のため、島根県飯石郡飯南町、平成二十四年三月三十日(金)～三十一(土)

○校史・学術資産研究センター

・堀越祐一「國學院大學の学術資産研究の発展と公開」プロジェクトによる調査のため、毛利博物館・山口県立文書館、平成二十四年二月六日(月)～八日(水)

○研究開発推進センター

・上山和雄・手塚雄太・内山京子「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」プロジェクトによるシンポジウ

ムの参加及び資料調査のため、佐賀大学・佐賀県立図書館・鍋島報効会、平成二十四年二月四日(土)～七日(火)

・遠藤潤・菅浩二・中野裕三・森悟朗・宮本誉士・大東敬明、北海道神宮に関する調査のため、札幌市、平成二十四年二月九日(木)～十一日(土)

・菅浩二・白川博一、研究交流フォーラム企画準備及び国際研究交流の現状視察のため、アメリカ合衆国マサチューセッツ州、ハーバード大学、平成二十四年二月二十二日(水)～二十九日(水)

・菅浩二・中山郁「招魂と尉霊の系譜に関する基礎的研究」プロジェクトによる慰霊施設の実地調査のため、オーストラリア・キャンベラ市、オーストラリア国立戦争記念館、平成二十四年三月十五日(木)～十九日(月)

刊行物

○日本文化研究所

・國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所発行「國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報 第四号(平成二十三年九月三十日発行)」

○学術資料館

・國學院大學研究開発推進機構学術資料館(神道資料館部門)発行「國學院大學神道資料館報」第十二号(平成二十四年二月二十九日発行)

・國學院大學研究開発推進機構学術資料館(神道資料館部門)発行「神社と御神木・社叢」神社祭祀と御神木に関する調査」報告(平成二十四年二月二十九日発行)

・國學院大學研究開発推進機構学術資料館(考古学資料館部門)発行「國學院大學学術資料館 考古学資料館紀要」第二十八輯(平成二十四年三月三十一日発行)

・國學院大學研究開発推進機構学術資料館(考古学資料館部門)発行「島根県飯石郡飯南町「琴引山学術調査報告」(平成二十四年三月三十一日発行)

○校史・学術資産研究センター

・國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター編「國學院大學校史・学術資産研究」第四号(平成二十四年三月九日発行)

・國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター編「校史」第二十二号(平成二十四年三月十六日発行)

○研究開発推進センター

・國學院大學研究開発推進センター都市民俗学研究会編「都市民俗研究」第十七号(平成二十四年一月三十一日発行)(※本誌は第十六号まで都市民俗学研究会によって刊行されてきたが、本号より研究開発推進センターで推進する研究プロジェクト「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」の研究成果の一つとして刊行することとなった。)

・國學院大學研究開発推進センター

編「國學院大學研究開発推進センター研究紀要」第六号(平成二十四年三月十日発行)

・國學院大學研究開発推進センター編「共存学・文化・社会の多様性」(平成二十四年三月十五日発行)

・國學院大學研究開発推進センター・渋谷学研究会編「渋谷学ブックレット三 渋谷を描く」(平成二十四年三月三十一日発行)

訃報

当機構客員研究員池谷浩一氏が、平成二十四年六月十日に逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

資料紹介 古代の案（復元）



現在、多くの神社の祭儀で、「案」と呼ばれる机が用いられている。これは延喜式にもその名が登場する。往古から用いられていた祭具である。現在はヒノキでできた白木の案を用いることが多いが、古代より行なわれてきた特定の祭祀などにおいては、樹皮を向かない枝で作ったものが、現在でも用いられることがある。古代以来の朝廷祭祀であるところの春日大社の春日祭や率川神社の三枝祭（いずれも奈良県）で用いられる黒木の案は、そのよく知られた例といえよう。

この黒木の案の例を踏まえると、白木の案が、最近になって用いられるようになったようにも受け止められるものであるが、ここで紹介する案の存在が示すように、これも古墳時代から用いられていた可能性が極めて高いものである。

今回復元した案の原品は、静岡県浜松市東区の山ノ花遺跡から出土したものである。古墳時代中期・五世紀のヒノキ製の白木でできており、現在は浜松市博物館に所蔵されている。同遺跡では、勾玉や鏡の模造品と目される有孔円板などに加え、木製の大刀の柄、鍬、さらには紡錘車や琴などの模造品も出土している。これらは、信用に足る文献史料に乏

しい千五百年前において、鏡や玉に加え、武器、農具、紡織具、楽器のレプリカを用いた神まつりが行なわれていたことを端的に示している。換言すれば、山ノ花遺跡においては、現代の神道祭祀で用いられても不自然ではないような奉獻品や祭具を用いたまつりが行なわれていたのである。案もそのために用いられていたものと考えられている。

山ノ花遺跡出土案は、天板と脚部分かれた状態で複数発見された。当然使用に際してはこれらを接合させて用いていたものと見られるが、注目されるのはその方法である。これらの案は、脚の最上部に柄が設けられており、天板の溝にはめこむ形式をとっている。出土品の天板のはめこみ口が左右の脚で正反対となっていたり、その柄の先端や溝の底の広がり方が緩やかであったり、いくらかの相違点もあるものの、これは、現在神社の祭祀祭礼で一般的に用いられるものと同様の、蟻掛の脚の案に他ならない。

しかし、現在の案と比較すると、出土した案は、比較的手が込んだ仕上げになっていない点も注意を引く。脚は、八足案ではないが台形に整えられており、下部を弧状に整えたり、中心部を切り抜いたりして、四つ足にしている。また、天板の側面は切り落としではなく、内側に傾斜をつけているものがあつた。おそらく槍がんで成形したのであろう。また、脚と天板を斜めに接合するようにになっており、脚が外側にやや開くようになっていているものもあつた。こ

した案の意匠は、現代においても、机として一定の価値を持ちうるものと評価できる。

復元は浜松市博物館の協力のもと、学術資料館神道資料館部門において平成二十二年度に実施し、複数組ある天板と脚部の中から、溝と柄の幅が合致するものを選定した。天板の長さは八〇センチメートル、幅は三八センチメートルで、出土品の中では比較的大きなものである。復元は同材質・同じ構造で、使用されていた当時の状態に近づけるよう留意した。表面の仕上も、原品の状況を確認の上、槍がんなを用い、より忠実な再現にとめていた。

案の歴史的意義や復元過程については、笹生衛「古代の案を復元する」〔神道資料館館報〕十一号（平成二十三年）所載）において詳細に解説しているのので、そちらをご参照いただきたい。

（加瀬直弥）



【参考】春日大社春日祭御棚神饌